何だかわからない時間

細　見　和　志

この春、チャペルオリエンテーションの講話を４回行った。総合政策学部でも、学部長が特に新入生対象のお話をすることが恒例になっている。なにしろ、初めてキリスト教の礼拝に接する学生が大半なので緊張する。自分の話し次第で、もうチャペルなんて行かないと思う学生がいるかもしれない。責任重大である。そこで、全員が聖書やキリスト教について何も知らない、興味もない、と仮定して話をしてみた。

なぜ、１時間目と２時間目の間に30分も授業でもない、休憩でもない時間が設けられているのか？　チャペルの時間は、単位が出ないから授業ではない。もちろん、休憩時間でもない。お祈りや讃美歌を歌ったりするので、講演会でもない。ちょっと乱暴だが、要するに、「何だかわからない時間」なのです、と説明した。でも、この「何だかわからない時間」を関西学院大学は、昔からとても大切にしている。それこそ、この時間がなくなれば、関学が関学でなくなる、といっていいいくらい、心底大切にしている。それはなぜか。

ここまでくれば、いよいよ私の話しの核心である。聞いている新入生の皆さんも、「なんでやろ」というような表情でこちらを見てくれている。ここで、「関学はキリスト教主義の学校だからです」と言ってしまうと、ダメである。答えが優等生過ぎる。私は、「チャペルは余白の時間です」と答えた。「主題」に対する「背景」、「図」に対する「地」といってもいい。絵画において、主題となる人物が際立つためには、何も描かれていない余白が必要である。音楽においても、同様だ。京都・竜安寺の石庭を持ち出すまでもなく、石の造形を活かしているのは、何もない白い砂なのである。

チャペルは、関西学院大学の教育の主役ではない。主役は、各学部それぞれの教育である。授業のシラバスには、授業の目的や成績評価の方法が明示されている。まさしく、大学教育の主題であり、図である。しかし、チャペルにはシラバスも評価もない。しかし、なにも描かれていない余白が絵画に生命を与えるように、チャペルという「何だかわからない時間」が、キャンパスに集うすべての人に生命を与えるのだと思う。「何だかわからない時間」だからこそ、どんな時間にでもなれるのである。出会いの時、安らぎの時、慰めの時、発見の時、問いかけの時、それを決めるのはチャペルに集う一人一人である。

（総合政策学部長）